

三月二八日 土曜日のアンドレアの日記より

トスカニーニのミサソレムニスをきいた。なんと素晴らしい演奏だろう。アルフォンゾがあたしのお腹をなでながら、八月の末まで待ち遠しいね、女の子がほしいな。君のように美しい子になるから」と言う。ほんとに優しい夫、あたし「でも男の子だったら、アルトーロと名付けたいけど」と言ったら、しばらく考え込んで、「それはいい、僕はアルフォンゾ、君はアンドレア、息子がアルトーロ、親子三人揃ってADCと同じ頭文字を持つ。」彼には武彦とのかかわりなど、すべてを話した。トスカニーニの実演を聴きにいかなければ、あたしは身籠らなかった。あたしがアルトーロという名前を付けようとするのは、その一夜に未練があることを知り尽くしていながら、彼はあたしの願いを受け入れてくれた。彼はすべてを赦し、あたしを愛してくださる。ミサは神の子羊が世の中の罪を取り去ってくださると謳う。赦しがあたしたちを清めてくださる。愛することによって、アルフォンゾはあたしを清め、あたしに新しく、生きていく力を与えてくれた。あたしは恵まれている話を前年の一二月に戻そう。母は、いや、ここからは実名だけで通そう。アンドレアがパリからベンチュラに帰り着いたのは一八日だった。「いいニュースとはなんだい」と父親が聞いたら「父さんがお祖父さんになることです」とアンドレアが答えた。びっくりしたが、話しにくい難関がそれによって取り去られ、アンドレアは父親にすべてを隠さずに話すことが出来た。

アルフォンゾはスペインからの留学生で、一九五一年の九月にスタンフォード大学でMBAをとるためにきた。次男坊でアメリカの経営方式をスペインの農場経営に適合させてみたい、という特別の目的をもっていた。五二年の夏、スタンフォードからの紹介でアンドレアの父の農場で実習をした。マメに働き、政府が規制する農産物の報告書を整理し、無駄をどういう風にして省くかということを先ず使用人の立場から考えて、そして使用人に納得がいくように排除していった。老練な経営者だった父は、この若い学生が他人の気がつかない所に目をつけ、改善を進めていくのに感心した。それに彼のスペイン語はメキシコから来る不定期移民労働者によく通じる。父にとって彼はもってこいのいい協力者となった。彼が大学に帰る時父はごく自然に彼をクリスマスに招いた。アルフォンゾが農場についたのはアンドレアより二日おくれた二〇日で、彼のポケットにはダイヤモンドの婚約リングが潜められていた。

翌日アルフォンゾは教会のサービスが終わり、一家のディナーが終わった後、アンドレアにプロポーズした。アンドレアが少し時間をくれ、と言ったのに、怪訝な顔をしたが、根気よく待った。アンドレアは父と会い、妊娠している以上、拒絶すると告げた。父はアルフォンゾをどう思うか、よく考えなさいといい、彼に妊娠していることを正直にいいなさい、と忠告した。アンドレアはそれを自分ですることは出来ない、父さんがしてくれ、と頼んだが、父はそれを断った。それでアンドレアは意を決めて、アルフォンゾのプロポーズを断った。気心の知れた女友達だと思っていただけに、これは衝撃だった。

「何故、何故？」返事がない。

「アンドレア、何故なんだ、それだけ言ってくれ。」

「妊娠しているの。」

アルフォンゾはその場を離れ、農場を去った。アンドレアは部屋に戻り、戸を閉め一晩泣き続けた。

今までアルフォンゾを結婚相手として考えたことのないアンドレアは「なぜ昨晚泣き通したのか？」と自分にも不可解だった。朝食のテーブルを離れ、父とは一言も交わさず、農場に出て独り歩きをした。冬の太陽が何時の間にか眩しくなっている。実習生だったアルフォンゾは家族の一員として、家に起居していた。しかし、父から賃金の入っている封筒を貰う時のあの嬉しそうな顔付きが目につく。そう言う時には彼は一介の使用人にすぎなかった。彼となれなれしく話し合ったこともなければ、手を握り合ったこともない。父母がカレツジに行く前に、「この農場が何時かはあなたのものになる事をボーイフレンドに言わない方がいいですよ」と注意してくれたことを思い出す。「まさか、この農場を自分の手に入れたいから」という疑いが心を鷲めた。疑念が長く続いた。「なぜあたしと結婚したいの？あたしを愛しているかしら？」答えはなかなか出て来なかった。ストロベリーと一緒に摘まんでいた時のことだ。アルフォンゾが稀に見る大粒のベリーを見つけ、それを摘まみ、隠しながらアンドレアの前に現れ、「目を閉じて口を開けて」と言ってアンドレアの口に入れてくれたことがあった。目を開けると彼の黒に近いブラウンの目が如何にも満足そうに輝いていた。しかしそれは唯の戯れ、恋の始まりだとは言えない。

事実パリで「独りで赤ちゃんを育てる」決意をしたアンドレアは結婚を考えていなかった。武彦との交わりは快感そのものだった。しかしそのために妊娠し、その妊娠が武彦に拒否されると、あの交わりが不快なものになり、不潔なものになってしまった。二度とそのような経験をしたくない。結婚には性が伴う。もう真っ平御免だ。

アルフォンゾの求婚を拒絶してよかった。あたしが「妊娠しているから」と言ったから、この穢れているあたしに彼が近づいてくることはもうあるまい。そう自分に言い聞かせてみたが、心の重荷を下ろすことが出来ず、淋しさに襲われ、地面に大粒の涙を落した。あたりを見回すと、ここがこの夏アルフォンゾがストロベリーを口に入れてくれた所だった。

それから三日たってクリスマスとなった。ディナーが終わったころアルフォンゾが現れ、再びアンドレアにプロポーズをした。日曜日アンドレアに拒絶されてスタンフォードに帰る心算で北に向けて車を走らせた。四〇キロほどしてサンタバーバラの町に入ると何のために誰もいない大学に帰るのかわからなくなってしまい、それかといってベンチュラに帰るのには気が引け、サンタバーバラに留まって、連日太平洋に落ちる太陽を見ながらアンドレアのことを考え続けた。「彼女は妊娠している、それでも僕は彼女を愛し、彼女と結婚したい。かといって、他人の子供を自分の子として育てることができるだろうか？」最初の答えは「出来ない」と言うことだった。それはアンドレアと結婚できないことを意味する。「それでい

いのか、他にもいい人が見つかるから」と自分を慰めようとしたが、それが出来なかった。そのうちにアンドレア以外の女と結婚することは考えられなくなってしまった、考えれば考えるほど、アンドレアはアルフォンゾの意中の人であり、一生の伴侶だと言う意識を持つようになる。そしてやがて生まれてくる子はアンドレアの子であり、彼女を愛するならば、彼女の子をも愛することが出来るという風に考えが固まった。子供をおろさないというアンドレアの決意は彼女の母性愛の現れであり、彼女は真心をこめて子供を愛し夫としての自分を愛してくれることが出来る女性に違いない。ベンチュラに戻ってきた時、アルフォンゾの胸にあったのは、この永遠の女性を自分の妻にすることだけだった。

再びプロポーズを受けたアンドレアは戸惑った。「しばらく時間を下さい」と答え、農場に出た。あの人が見てくるとは夢にも思っていなかった。あたしが妊娠していることを知っていながら、この穢れたあたしに結婚を求める。あたしを心から愛しているのに違いない。先日彼が農場乗っ取りの為に結婚を望んでいる、と思ったのは見当違いだった。あたしは彼を使用人の一人だと思って見下げていたのかしら、だとすると、あたしがこの人を夫として愛することが出来るかしら？一体アルフォンゾとはどういう人だろう？

よく考えて見るとアルフォンゾと直接彼の生い立ちについて話したことがなかった。でも父さんは彼の事をよく知っている。家柄はスペインの旧家。内戦で多くの資産を失ったが、彼をアメリカに留学させるほどの資力が残っていた。「若いのにね、人の話をよく聞き、外の人々の立場から物事を考えることが出来る。忍耐力がある。そして人の過ちを赦す雅量をもっている。内戦で苦勞をつんだだろうな、いい男だよ」と父さんがよく言っていた。自分はと言えば、武彦との交わりで後ろ目を感じているし、タケちゃんの事が忘れられない。人を愛する気力を失っているかも知れない。でもこの人はあたしを愛して結婚を望んでいる。父の為にも、とにかくアルフォンゾと話してみようと思って、家に入り彼を歩きに誘った。

黄昏の空が少しずつ暗みを増して、「早く決めなさいよ」と促していた。アルフォンゾがあたしの手をとった。ちっとも不自然ではなかった。あるところまで来ると、彼がいきなり止まり、「ここで君にストローベリーをこの夏上げたこと覚えている」といって、あたしの唇に彼の唇を合わせて熱烈なキスをした。胎児が「母ちゃん、おめでとう」と言ってくれたような気がした。「ええ、あなたと結婚します」という言葉が思わずすらすらと口から出た。